

上高野 〈京郊集落の営み〉



〔李之井堰絵図〕（重要文化財・八瀬童子会蔵）

平安時代、高野^{たかの}は狩猟場だったことから鷹野ともいわれ、後に高野と記されるようになったという伝承があります。江戸時代の高野村は、明治二十二年（一八八九）の市町村制施行によって修学院村の大字となり、昭和六年（一九三二）京都市左京区に編入されて上高野^{かみたかの}と表記されるようになりました。

平安時代は洛外の野原でしたが、時代を経るに従って少しずつ開けてきました。それは高野が京都から若狭方面に至る重要な流通路（若狭街道、後に鯖街道^{さば街道}とも呼ばれます）の分岐に位置していたからでした。十五世紀後半には関所も置かれており、その代官を務めていたと思われる高野の地侍である蓮養坊承覚の活動も知られます。十六



現在も使用されている「李制水門」

世紀中頃からは隣村の八瀬と境界争論を起こし、江戸時代に入っても争論は続きます。なお江戸時代、高野村は全てが禁裏御料地となります。村の行政は、庄屋二名と年寄八名が中心的役割を果たしていました。

江戸時代の高野村で注目されるものの一つに、農業用水路の開削があります。いわゆる高野隧道たかのすいどうです。村内のうち高野川南岸の田畑一帯は、川よりも耕地の方が高く、したがって灌漑用水に困っていました。そこで隧道を建設して、高野川の水流を高地に導き入れる土木工事が行われました。第二代京都代官だった五味藤九郎豊旨の手腕によるもので、延宝五年（一六七七）に完成しました。水の取り入れ口は、ケーブル八瀬駅南方の高野川沿いにおいて、「李すももの之井堰いせき」と命名されました。六十歳余に及ぶ水利トンネルは、現在も利用されています。さらに後年には、高野川右岸から取水した「桜井之井堰さくらいのいせき」も完成しました。これも現役として役割を全うしています。先人の知恵と努力は、高野の財産として残りました。また高野には三宅八幡宮（現三宅八幡神社）が鎮座し、子供の疳かの虫封じの神様として、江戸時代末期から庶民の信仰を広く集めました。

現在は家屋が密集する郊外の住宅地と化していますが、古くからの高野の歩みは、今もしっかりと受け継がれています。

松ヶ崎 〈自治と法華の里〉



北浦溜池〈宝ヶ池〉の普請のさまが記される（松ヶ崎立正会蔵）

五山送り火「妙法」のふもとに広がる松ヶ崎^{まきがさき}。平安時代は比叡山延暦寺とのかかわりが深く、松崎寺が現松ヶ崎小学校付近に建立されました。集落一帯は比叡山の西麓に位置して街道沿いにあったため、中世においてはたびたび戦乱の兵火を蒙ります。古来より天台宗の影響の強い地域でもありましたが、鎌倉時代末期に日蓮の弟子であった日像の教えに導かれ、松崎寺住職の実眼は法華宗に改宗。寺名を妙泉寺とし、村人全員は法華宗の信者になったといわれています。以来集落は法華一宗となり、今に至っています。

松ヶ崎題目踊^{たいももどり}（写真・京都市無形民俗文化財）や松ヶ崎妙法送り火（京都市無形民俗文化財）は、この改宗時における村人の喜びをあらわしたものと伝えられています。なお送り火の「妙」と「法」は、同時期につくられたものではないと考えられています。少なくとも江戸時代初頭には両文字の送り火が文献から確認できます。

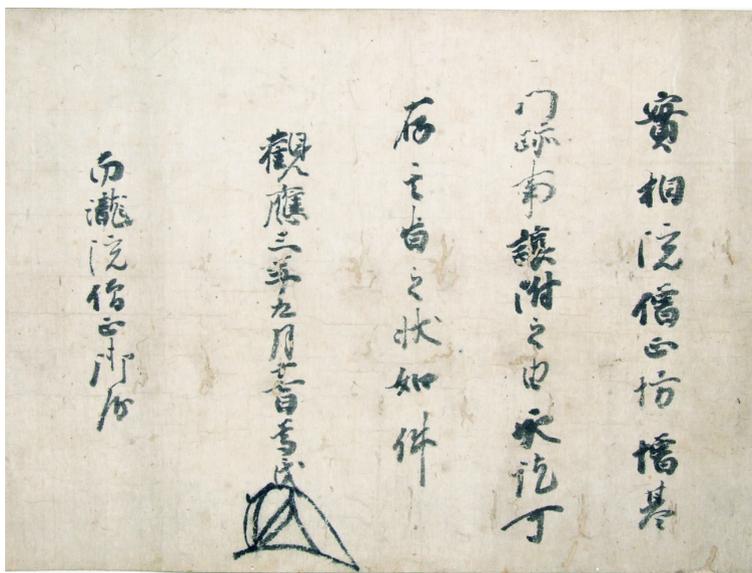


松ヶ崎題目踊（京都市文化財保護課提供）

中世から近世にかけては、集落の自治機能が整えられました。江戸時代には東町・堀之町・辻之町・中之町・西之町・川之町の六か町から編成され、集落の組織化が図られました。隣村と取水をめぐる争いも続きましたが、その打開策から生まれたのが溜池の建設でした。宝暦十三年（一七六三）には北浦溜池（現在の宝ヶ池）の完成に向け、村人の負担によって大がかりな工事が行われました（写真）。その後も拡張申請は続けられ、現在のかたちとなりました。

明治時代以降は小学校はもとより、京都高等工芸学校（現在の京都工芸繊維大学）、病院、浄水場などといった施設が建ち並ぶようになって、往時の田園地帯は大きく変貌していきました。宝ヶ池周辺も戦後は公園となって整備され、人口の増加と相まって松ヶ崎はすっかりと市街化しました。とはいえ現在「公益財団法人松ヶ崎立正会^{りっしょうかい}」なる組織のもと、しっかりと伝統行事や文化財は守られて、後世に引き継がれるよう努力されています。

岩倉 〈実相院と大雲寺〉



將軍足利尊氏が実相院門跡の後継者了承を記した、観応3年(1352)の文書【実相院蔵】

現在の岩倉は、江戸時代以降の岩倉・長谷・中・花園・幡枝の五か村が、明治二十二年（一八八九）に合併して愛宕郡岩倉村となり、さらに昭和二十四年（一九四九）京都市に編入されて、左京区岩倉となりました。岩倉という名前は、古代において神が降臨した磐座及びその信仰から起こったものと考えられています。その神聖なる場合は、現在も石座神社や山住神社に名残をとどめています。このような岩倉地域にとって、長い歴史のなかで最も象徴的な存在とは、実相院と大雲寺でした。

平安時代になると岩倉には、大雲寺や解脱寺（早くに廃寺）といった天台寺院が建立されました。なかでも大雲寺は天禄二年（九七二）創建で、中世には衆徒や坊官による寺院組織が調えられており、実相院門跡の支配下にありました。実相院は鎌倉時代中期頃には創建されていましたが、当初は現在の北区紫野にあり、後に上京区五辻通油小路（実相院町）に移り、応仁の乱の戦火を避けんと現在の地に移転しました。岩倉の地を選んだのは、大雲寺を南北朝時代から配下としていたことになみず。

さて大雲寺については、創建時より広大な寺観を誇っています。



大雲寺本堂の右側には、現石座神社が鎮座する【大雲寺絵図(部分)】実相院蔵

した。現在の石座神社は、もとは大雲寺の鎮守社で、八所大明神と称しました。現存の関伽井も当時を偲ぶことのできる遺跡です。大雲寺には後三条天皇（一〇三四～七三）の第三皇女が精神を患った時、寺の井水を飲んで治ったという伝承から、江戸時代には精神治癒を願う参詣人や滞在者が大勢いて、癒しの寺でもありました。しかし昭和末期に突如として姿を消し、跡地には病院が建てられました。

この大雲寺に隣接していた実相院は、大雲寺を統括する一方、足利将軍や幕府とのかかわりあいをもちながら、門跡寺院としての格式を確立していきました。現在の実相院境内は寛永年間（一六二四～四四）に後水尾天皇や東福門院の支援によって再興されたものです。現存する数ある寺宝のなかでも、特に筆者が注目しているのは膨大な古文書が存在です。中世から近代にかけての門跡寺院の実態、大雲寺や岩倉地域などのことが詳述されているからです。なお実相院文書約四〇〇〇点のうち、中世文書三巻四一冊一八一通が、平成二十七年に京都市指定文化財となりました。